

経済学者・同志社大学大学院教授

浜 矩子 さん

「女性ではあるが…」なる修辞を使うと、ジェンダーフリーの方々からはお叱りを受けるかもしれないが、女性ではあるが、経済に強く(当たり前か)、多くの著作を矢継ぎ早にものし、政治状況にしっかりとコミットし、論理的でブレず、自分の言葉を持っていらして、造語やユーモアも縦横に駆使される……そんな浜矩子氏に、今回お話を聞くことができましたので、お届けする次第です。

(聞き手・構成：味岡 康子)



—— イギリスには、中学1年生の夏まで住んでいたんですか。

小学校の3年生のときからです。

—— そうすると、小さいときから円とポンドの関係などを日常生活の中で経験されていたわけですか。

日常生活の中では意識しませんでした。日本に帰って中学2年生の頃、ポンドの大きな金利下げがあったときに、社会科の授業でそのことを先生が話してくれ、それはイギリスのことだったので興味があり、その為替の金利下げとか金利上げという行動がどういうものであり、どういう結果をもたらすのかということを初めて意識しました。そのから練りが面白くて、そういう面白いなぞ解きの世界がたくさん転がっているのであれば、経済という分野をマスターしたいと思ったんですね。

—— それでは、大学入学時には迷うことなく経済学部を選ばれたんですか。

はい、そうですね。

—— 大学卒業後は三菱総合研究所時代にまたロンドンに行かれたね。

9年間いました。2度目に住んだときの、以前の1960年代との大きな違いは、ロンドンが言ってみればものすごく愛嬌のいい街になっていたことです。1960年代前半のイギリスというのは、それこそ大英帝国、大産業国家の片りんが少しは残っている時代で、来るものは拒まないが、特段それ以上にオープンスタンスを取る感じではない雰囲気でした。それが、観光客を呼び込んだり外に対してオープンでなければいけないという雰囲気にかわり、ロンドンが観光で、対外的に愛嬌を振りまくことで生き抜いていくという感覚の街になり、言ってみれば軽佻浮薄化している、そういう印象が強かったです。

—— ビートルズが生まれたのは？

ビートルズは、1960年代の前半に、私がイギリスにいた間にデビューをしました。だから、少女時代は、ビートルマニアとして育ち、ビートルズが出現してくるプロセスを目の当たりにしていたという感じです。

——ビートルズは、一時代を新しく確実に切り開いたという文化的なインパクトはあったんですか。

スウィングロンドンという言い方がすごくはやりましたね。スウィングというのは、のっているとか、ものすごくトレンドーだというニュアンスです。イギリスが突然そういう若者文化の中心地としての新しい息吹を、ビートルズの出現によって持ったということはあるでしょうね。それまではアメリカのゴールデンフィフティーズの音楽がどんどん入ってそれに追従していた。エルヴィス・プレスリーだったり、その他のアメリカンポップスの後を一生懸命に追っている感じが、ビートルズの出現で主客転倒し、マーギーサウンドが世界を席卷しました。マーギーというのは、あのリバプールを流れているマーギー川ですが、その周りでビートルズおよびグループサウンズ的なものが出てきたので、それがすごくトレンドをセットするという状況が生まれたのは確かに新しいことでした。マリー・クワントやツイッギーが一世を風靡していく口火が切られた時代というのが、1960年代の半ばに差しかかる所でしたね。

——イギリスは階級社会かと思うのですが、その階級社会を壊すような大衆文化、大衆社会という、そういうとらえ方もありますか。

確かにビートルズは勲章をもらいましたし、それは非常に画期的な出来事だったとは言えますが、イギリスの階級社会というのは階層社会と言ってよく、上下関係というよりはすみ分け関係なので、壊すということを誰もそう望んでいるわけでもなく、お互いにお互いのことがよく分かっていて、上手に世の中をすみ分けている感じです。その共栄共存的すみ分けの構図がビートルズの出現で特に壊れたということはないと思いますね。

——著書の中で『ヴェニス商人』の話をされ（「地球経済のまわり方」）、そこでの悪役は、シャイロックというこ

とになっているが、エコノミストから見るとシャイロックというのは、金融機能を果たしている点を経済史的に評価しなくてはならないとおっしゃっておられましたが、今のグローバル経済化の中で、金融は信用とは関係なく変容していくのでしょうか。

人、物、金が経済活動を形作っていくわけですが、要するに人による物づくりを支える金回しというような、相互的な位置付けにあるのが金融の本来の姿だと思うんです。そういう黒子的サポート機能を果たすというのが、信用に基づいた金融というものの位置付けですが、そういう人による物づくりのための金回しという位置付けからまったく逸脱してしまって、金回しのための金回しのスケールと速度が目に見えないところで巨大な、そして超高速で展開するというふうになっているところに、今のグローバル経済の1つの大きな問題があります。だから、金をやっぱり本来の身の程をわきまえた位置付けにどうやって立ち戻らせるかということが、人のためにうまく回るグローバル経済を創り出していくために、すごく重要な課題になっていると思います。

——グローバル経済の発展というのは一方で国民国家を衰退させるけれども、だからこそ国家をより意識させるような動きが出てきているとのご指摘です。

国境なき時代になってしまったので、国境をその存立基盤にしている国家は、身の置き所がなくなるというか、存在感が希薄化する状況になった。国境があることを前提に金融政策や財政政策をはじめ、国家の政策は構築されているわけですが、その政策が働きかける対象となる人、物、金はいまだかつてなく容易に、そして広がりを持って国境を越えていくと。そうすると、従来型の国家の政策は非常に対応力が低下してしまう。その存在感の希薄化に必死で抵抗しようとする中で、逆説的な形で、国家主義的なものを前面に出してきてしまうと。その典型が今の安倍政権のような構えであると言えます。

—— アダム・スミスの「経済とは人々を幸福にするものだ」とは、果たしてこれは現代にも通じる真理なのでしょうか。

経済活動というのは人間の営みなので、人間が人間固有の営みとして携わる活動が、人間を不幸にするというのはものすごく矛盾したことです。人間を不幸にする側面を経済活動が持っているのであれば、そのような活動を人間が人間に固有のものとして、連綿と営み続けることはないはずです。つまり、経済活動というのは本来的に人間を幸せにすることができなければ、経済活動として成り立ち得ないと、それは理屈としてそうなると思うんですね。だから、まさしくアダム・スミスが考えた、その共感性に根付く経済活動というのが、その本来の姿だと思うわけです。

でも我々の周りの現実を見れば、経済が前面に出れば出るほど人間は後景に退くことを強られる。経済効率が全面的に追求されればされるほど、そのことが人間を非人間的な不幸な状態に追い込むんじゃないか。だから、経済と人間は実は対立する関係にあるのではないかと、むしろその方が現実じゃないのという言い方は結構されますが、そういう見方の対象になっている活動は、実は経済活動ではないんだと考えてしかるべきですね。ブラック企業は企業経営をやっているわけではない。人をまさに物のごとく扱うような派遣法や労働法制というのは、その本来の経済活動の姿を破損するものであると。だから、アダム・スミスが言っている認識を再確認する必要があると思う。さもなければ、人、物、金が国境を越える時代状況の中で、人間はある意味共食いをしているって、経済活動の名に値するものは消えてなくなっていくということだと思います。

—— 英国の経済学者のJ・V・ロビンソンを引用され、エコノミストは一方何々、他方何々と分析するだけで、どの立場を取るのかを明確にしないと批判されておられますが、浜教授はかなり断定的な命題の著書を書いておられますね。

やはり経済分析はなぞ解きなので、そのなぞを解き真犯人を突き止めることが経済分析の仕事ですから、犯人はこいつだということを言わなきゃ話にならない。あれもありこれもありというのは、犯人捜しのプロセスとしては実に重要なことですが、その結果こうなんだと、こういうふうには自分には思われると言わなければ、言われた方は混乱して終わるだけです。

—— エコノミスト、しかも女性で、ご自分の結論をはっきり言う方も少ないと思いますが、それは小さいときの海外生活から生み出されてきたものですか。

特にそういうこともないと思いますが、イギリスに1960年代初頭に行ったときにせよ、そこから中学生になって日本に帰ってきたときにせよ、今のように子供たちもグローバル化している時代ではないですから、やはり非常に異質な存在としてそこに登場するわけです。その中で自分の位置付けを確立しようと思ったら、やはり強気で、どういう人間であるかという自分のアイデンティティーをしっかりと前面に出していくしかない。さもないとその位置付けは人に決められてしまう、あるいはものすごく存在感が希薄になってしまう。それでしのいでいくという手も勿論ありますが、それが嫌ならやはり存在感を前面に出し、印象付ける必要があるわけで、そういう構えでいかないといけない場面に遭遇することが、小さいころに結構多かったと思います。

—— 「1ドル50円時代を生き抜く日本経済」という本も書かれていますけれども、円高とドル安の関係はさておき、ドル安というのはやはり歴史の必然なんですか。

まったくもって必然だと思いますね。1ドル360円というところから、今は50円からはだいぶ遠のいているとはいえ、120円というところまできて、その歴史的な経過の中でどんどん価値が低下してきていることは、もうすでに歴史としてははっきり検証でき、その背後に何があるかも非常によく分かる。要するに、かつては

経済活動を営む生き物は人間しかいないわけで、だから経済分析を行うということは、おのずと人間にフォーカスするということになる。そこを見失ってしまうと、本当の経済学とは言えない、意味不明で難解でつまらない感じになってしまうわけですね。

浜 矩子

ドルがなければ夜も日も明けぬという状態から戦後はスタートしましたが、どんどん世の中がドルを必要としなくなる、一方でアメリカは借金がかさんでくるとなったら、ドルという通貨の価値が低下するのはもうごく自然の成り行きであって、合理性のある経済の力学に従って、最終的な落ち着き所を探しながら減価してきているというのが、ドルの戦後の歩みです。

— それは、やはり長い目で見れば止められないんじゃないかということですね。

それはもう当然の流れ。だから、むしろ今は政策要因によってそういう自然のパスから強制的に円、ドル関係は外されてしまっていると。本来歩むべき道とは違うところにちょっと回り道をさせられて、道草を食わされている。怖いのはその道草を食っているうちに、元の本来の方向に帰ることができないまま、超円安の奈落の底に落ちていくという恐れが結構強まってきたと思うので、それは大いに警戒しておかなければいけないことだと思いますけれども、ことドルの価値がどうなるかということに関する限りは、どんどん安くなっていくというのはもう自然の成り行きだと思いますね。

— 浜教授は、アベノミクスへの批判者でもあるわけですが、民主党の菅直人氏は、実は円安論者だったんだと。民主党時代の経済政策というのは、どう見ておられましたか。

民主党時代の経済政策は、何者なのかが分からないうちに終わってしまったし、民主党の中の誰と話すかによって違うという側面がありました。けれども、鳩山由紀夫氏が総理大臣として行った第1回目の所信表明は、時宜を得た、時代をよく読んだものだったと思うんですよね。コンクリートから人へ、いたずらに量的な成長を求めず、というモチーフもそこに出ていた。21世紀に入り、ここまでの成熟段階を迎えた日本経済をいかにマネージしていくのか、そういう日本経済をどのようなイメージで受け止めるかということについて、かなりいい線をいっていたと思います。

— 日本は、今は円安に向かっている。どこの国もみんな通貨安を追求していったら、最後はどうなるんでしょうか。

要は為替戦争の世界に突入していくということで、最下位争いですよね。一番低いところに誰が一番早く到達することができるかという、最下位の新記録争いみたいな格好になっていく。でもこれは結局のところ勝者はいないというのが過去における為替戦争の経験です。疲れ果てるだけで、明らかな勝者をもたらさないままみんな擦り切れる。だから、為替戦争というのは非常に怖く愚かな行動であると言わざるを得ませんが、始まっちゃうと止められない。だからこそやり始めちゃだめなんです。最初に仕掛ける者も、今回の日本の場合は違いますけれども、背に腹は代

えられず自己防衛的にスタートすると、対向的に他の人も同じことをやり、自己防衛合戦をしている間に、互いに足を引っ張り合って奈落の底まで行っちゃうということになるわけですね。なかなかおぞましいことなので、特に日本のような経済の規模と成熟度を持っているものが、通貨安政策を追求するというのは非常にまずいですね。本当にそれしかない貧しい小さな国であればしょうがないし、そういう国が単独で自国通貨安を追求したところで、インパクトが世界中に及ぶわけではないけれども、あらゆる観点から考えて日本のような到達度の国の経済政策が通貨安を追求するというのは、まったく容認されてはいけない方向性だと思いますね。

——少し前にピケティが人気になりましたが、どう評価をされますか。

ピケティも非常に面白いと思いますが、このピケティ現象において最も面白いのは、あれだけ売れたということですね。今日のグローバル市民たちの感性、彼らが漠たる脅威として受け止めていたことが実際に脅威、格差とか貧困をつくり出す時代状況があるということが書かれている。だから、みんなあんな巨大本でも買って読むわけで、そういう意味ではグローバルな市民たちの時代感覚のバロメーターとして、非常に面白い機能を果たした本だと思いますし、市民たちの感性はなかなかのものだということが証明されたと思いますね。そこが、一番面白いことだと思います。

——生存している方でも亡くなった方でも、日本の経済学者の中で評価をされている方はおられますか。

総合的にこれはという人はちょっとないですね。個別テーマについてこの人が言っていることはいいということは言えると思いますが、むしろそこに問題があるんじゃないかという気がしますね。つまり、アダム・スミスとかカール・マルクスなどは、経済活動というものを総合的、全般的にとらえて、まさに人間の営み

としての経済活動というものの全容をきちんとつかまえ、把握し語った。しかし、日本の経済学が1950～1960年代の後半ぐらいから、そういう感性がすごく弱まったことに問題があると思っています。それにはいろいろな理由がありますがけれども、日本の場合は特にその辺から経済学が自然科学コンプレックスを持つようになったということが言えると思いますね。

——それはどういうことですか。

つまり自然科学は実験科学であり、実験でなくても数字を持って1つの答えに到達するというわけですが、社会科学全般、特に経済学というのは、事柄の性格上、正確に間違いなくデータの的にこのように検証される、結果はこれだというふうになかなか言えない。そこで、そんなものは科学ではないと言われたときに、まともに反論する、あるいはそういう批判を歯牙にもかけずやるべきことをやるというのではなくて、その自然科学や数学のまねごとをするという方向に、だんだん動いていった傾向がある。経済学って数学でしようとして若者たちが思い込んでしまうほどに、そういう計量的なものを志向する方向性が出てきて、そうするとやはり人を語るなくなってくるということがあり、そこから経済学のある意味では墮落が始まったと言っていいのかなと思います。そういう傾向が特に日本では顕著だったかなという気がしますね。

——あくまでも人を中心にした経済学ということが一番重要なものだと思っていらっしゃるということですか。

それはもう当たり前のことであって、経済活動を営む生き物は人間しかいないわけで、だから経済分析を行うということは、おのずと人間にフォーカスすることになるわけですね。そこを見失ってしまうと、本当の経済学とは言えないものになってしまうと、非常に意味不明で難解でつまらないという感じになってしまうわけですね。

—— 弁護士あるいは弁護士会について、ご意見をいただきたいと思います。

日弁連は今、この時代状況の中でとても頑張っておられると思うので、そこには最大級の敬意を表したいと思います。それをしっかり申し上げておいた上で、それこそ今言った経済学の自然科学コンプレックスと似たような意味で、弁護士会がビジネスコンプレックスを、持たないようにしていただきたいということを結構思いますね。

—— ビジネスコンプレックスとは？

ビジネスの世界にお役に立てなければいけないとか、いわゆるビジネス界の人々が求めるようなスピード感がないということにひるみを感じるとか、平和憲法を守ることにどういう経済価値があるかというような設問に答えねばいけないなどと、思わないでほしいということですね。実学の世界に対してコンプレックスやひるみを感じることなく、法律、法体系というものの中における整合性を追求すると。そういう整合性の中に正義を見いだすという姿勢に、絶対的な揺るぎなき自信を持ち続けていただきたい。下手をすると、そういうビジネス的なものに擦り寄るためにはどうしたらいいかとか、どういうふうにボキャブラリーを調整したらいいかと考えておられるのかなと感じることがないわけではありません。それはまったく必要ないことなので、まさにこの経済学の自然科学コンプレックスと似たものの誘惑とか脅威に、負けることが絶対にならないようにしていただきたいと思いますね。

—— イギリスにおける司法の位置付けと、日本における司法の位置付け、あるいは弁護士の位置付けというのは少し違うものがありますか。

総じて言えば、イギリスの弁護士あるいは法律家に限らず、イギリス人はある意味では専門家、専門性という側面が前面に出るのを割合に嫌うような気が

する。あまり細かい、狭い範囲で専門家になるということが、人間としての深みとか広がりのおかげアンチテーゼとして嫌われるというか、頑張っている素人が好きみたいところがイギリス人には多分にあります。要するにジェントルマンイズムというのは、あるアマチュアリズムと限りなく重なるところがあって、あまり特定のことがよくできる技術者とか商売人をちょっと嫌い、誰もが普通の人である感じが割合に好き。だから医者にせよ、弁護士にせよ、大学教授であるにせよ、そういう役割仮面をかぶる前に普通の人という感覚がある。警察官だって、日本だとおまわりさんほどこまでラッキョウの皮をむいてもおまわりさんで、普通の人というのがなかなか出てこない。

イギリス人はすぐ化けの皮がはがれるというか、みんな結局は普通の人というところがあります。そういう意味で肩の力が抜けている。アメリカの弁護士は、専門性の固まりという感じがするじゃないですか。逆に、それを取り除いたら何も無い。アメリカのビジネスマン、特に金融系のビジネスマンもそうです。イギリス人はそれより前に、普通の人であるということを求める。だから、アダム・スミスの経済観などにもそういうところがあります。普通の人々の常識的な感性で理解できないものは、どこかうさんくさいんじゃないのという感覚です。イギリスの経済学にも自然科学コンプレックス的なところは全くないわけではないですが、日本ほどそう極端にはならなくて、数字は数字でこういう結果が出ているが、そこにある物語は何だろうということを考える感覚がちゃんと一応残っているのは、そういう役割仮面にとことん振り回されないというところかもしれません。

プロフィール はま・のりこ

同志社大学大学院ビジネス研究科教授。一橋大学経済学部卒業。1975年、三菱総合研究所入社。ロンドン駐在員事務所長、同研究所主席研究員を経て、2002年より現職。専攻はマクロ経済分析、国際経済。